

これは画期的だ！市広報紙「まつもと12月号」

～ 菅谷昭松本市長の「原子力災害と放射線被ばく」特集 ～

どこの市町村でも月に1回、広報紙が出される。すべての地域住民に配布されるだけに、その内容は首長にとって重要な位置づけになる。首長の政治・行政姿勢は広報紙を読めば大方予想ができる。チェルノブイリで医療支援活動の経験を持つ菅谷昭松本市長が広報「まつもと12月号」で「原子力災害と放射線被ばく」特集を組んだ。現状の放射能汚染問題の基本を踏まえた優れた内容になっている。これを紹介したブログにも「松本市が羨ましい」と書いてあったが、まったく同感だ。菅谷氏は信州大学外科医の職を辞してチェルノブイリ原子力発電所事故後のベラルーシで医療支援活動をし、NHK「プロジェクトX」でも取り上げられた著名な人だ。ユーチューブで見ることができるとの興味のある方は是非見てほしい。3月22日の段階で、記者会見を開き、重要な対策のポイントを示している。

(～以下、記者会見の概要)

【3月22日 松本市長記者会の概要】

- 核の事故という、放射線の事故というのは最初からある意味では最悪の事態を想定したかたちで先手、先手として手を打っていく事が大事。
- 一つは20キロの避難は、できれば30キロまで広げたほうがいい。
- 予防的に無機性のヨード剤を投与しておいたほうがいい。
- 場合によってはやはり50キロ位。チェルノブイリの場合だと30キロゾーンは人が住めない。できれば50キロ位までの範囲というのは注意したほうがいい。それくらい大気汚染が広がる。
- 特に乳幼児とか妊産婦に対してはヨード剤の予防投与。これはまさに内部被曝の問題。
- 政府を含めて皆さん方は外部被曝のことだけを取り上げている。
- 一つ目：マスクをすること。汚染され浮遊している放射性の降下物が鼻から気道、気管をと肺に入り血液の中に入って体に蓄積される。
- 二つ目：肌は露出してはいけない。皮膚から吸収されて体の中に入る。
- 三つ目：口から入る。経気道的、経皮、皮膚ですね、それからもう一つは経口的なんです。この三つが経路になっている。
- 取り込まれる放射性物質は、放射性ヨード、セシウム、ストロンチウム、プルトニウム。それが入ると大変なことになる。5年、10年、30年後に影響が出てくる。セシウムとかストロンチウムの半減期が30年。放射性ヨードの半減期は1週間。
- 今回のほうれん草の場合でも日本の基準で2000ベクレル/キロ。できるだけ口にしないほうがいい。
- チェルノブイリでもって甲状腺がんの子どもの数が増えたのが5年後から急激に出てきている。
- 事故前の時の子どもの発症率というのは100万人に1人か2人。それが汚染地になるとそれが100倍になったり、ひどい時には130倍ですね、ゴメリ市なんか。
- 将来のことを考えれば、作っている方々に本当に申し訳ないけれど、風評ではなくて事実としてやはり押さえておかなければいけない。
- パニックでなく国民も冷静に聞いてくれて、そして今の時期は食も少しひかえてもらうということ、そのためにも早くに放射性ヨードをやらないと、もう入ってしまったら終わり。
- 予防適応しておいた方がいい。今政府は後手後手。放射性ヨードっていうけれど、避難中に被曝して入ってしまったら後でやっても遅い。そういう事がちっともわかっていないことが、きわめて残念。
- 原発の今の状況は、是非ともこれは国をあげ、それから海外の力を借りてあそこをとにかく消火する。
- 水も食物も汚染。次は経路汚染、経口的になる。これからは放射能沈、放射線降下物、フォールアウト。土壌と水だつて汚染。葉っぱを牛や羊が食べる。そうすると放射性物質が今度はお乳の中に入る。そのお乳を人間が飲む。これがいわゆる食物連鎖。
- 汚染された土壌から根菜類が吸収。セシウムなどは消化管からほとんどが吸収される。放射線なら甲状腺に集まってしまう。



う。そういう事実を国からも報道していくべき。単に「冷静に行動してください」では？

- もし将来悪性の新生物が日本で増えてきたような状況の時にはいったい誰が責任とるんでしょうか。
- で放射能の許容レベルは、例えば事故の時にポーランドでは、事故から4日目国の命令で乳牛に新鮮な牧草を与えることを全国的に禁止している。100ベクレル/キログラム以上の汚染ミルクを子どもやあるいはまた妊娠、授乳中の子どもが飲むことを禁止している。4歳以下の子供は原則として粉ミルクを飲ませる。この時は急ぎ粉ミルク不足の分はオランダから緊急輸入をしている。
- 子どもや妊娠、授乳中の女性はできるだけ新鮮な葉菜類、葉物は摂取を控えるように指示。
- 今回の場合、1000ベクレル。ほうれん草なんか4000ベクレル。生産者は本当に気の毒ですけども、子どもたちの命、将来のことを考え政府が最大限に保証すること。
- ただ単にエックス線が当たって1回でこうだとか、そういう外部被曝のことを言われるので、
- 菅総理大臣が自ら国民に向かって、将来のことを考えて子ども達や妊産婦を含め胎児たちの命を守るんだと言わないと、私はいけないと思っています。
- 放射性ヨウ素がこんなに高いのに、長野県の今日の報道を見ていますと、「ほうれん草を洗わないで500グラム食べても安全だ」というメッセージを出している。これが事実であれば大変な事を言っている。
- 内部被曝の問題は一切出してないし、食物連鎖の話も一切出してない。

3月22日の段階でこれだけの見解が出せるのは、チェルノブイリで医療支援活動に実際に従事し、放射線被ばくの現実を知っているからこそだ。その後、起きたことは菅谷氏が指摘して通りになっている。3月22日のころのメディアはどうだった？ TVには連日、御用学者が登場して事態の火消しにやっきになっていた。海外では既に放射能拡散シミュレーション予測が出されているというのに、政府から何も出てこない。福島市や郡山市では市民グループによる自主的な検査で次々と高濃度の場所が見つかった。

この通信を精力的に出し始めたのもこのころだった。連日、Sv(シーベルト)という単位がマスコミから出されるが、まだ、その意味を多くの人々が理解することができない時期だった。少しでも理解の手がかりになればと、国際放射線防護委員会(ICRP)が出している被ばく線量と健康リスクの表を解説する内容を発行したりもした。今となつてはICRPの示した基準はあくまで外部被ばくを想定したのもで、内部被ばくのリスクの指標にはならないことが判明してしまった。被災地の仮設住宅は安普請で冷たい隙間風が吹き込む様子がニュースででていた。大晦日をどんな思いで迎えるのだろうか。

2011年の締めくくりに、福島第1原発から拡散した放射能汚染図を回転させ、泊原子力発電所の位置に合わせた図を載せて今年の号の終わりにしたい。誰に向けて書いているわけでもなく、自分の頭を整理するために作り続けてきたが、読んで下さる方も増えてつあるのでせめて100号までは続けようと思っているところだ。

今は冬の季節。冷たい北西の風が連日吹いている。泊が原発事故を起こせばたちまち放射能が襲ってくる。フクシマの教訓を生かすとするれば、小樽の我が家の場合、北西の風の時は、積丹半島の先端部に避難した方が安全かもしれない。

この図の一番外側の黄色は $0.5 \mu\text{Sv/h} \sim 1.0 \mu\text{Sv/h}$ を示す。これは年間被ばく線量で約8mSvに相当する。スウェーデンのサーメの人々のガンがここにきて34%上昇したそう。サーメの人たちの年間被ばく線量は2mSv。

この図のような事故が現実にならないように、泊原子力発電所は早急に廃炉にしてほしい。

北海道は国に準じてUPZ緊急防護措置区域30km圏にしたが、ほとんど意味がないことは一目瞭然だ。

何をやっているのかとため息の出る年の瀬。今年は脱原発の受け皿となる政党の出現でも願って初詣にいくとするか……。

